選者選評

稲畑廣太郎　先生

今年も多くの方から御投句を頂きありがとうございました。皆様の俳句に対する熱心なお気持ちがひしひしと伝わってきて、選をしていても楽しさとともに、気持ちの引き締まる思いも致します。若い方々がこれからの俳句界を背負って立って行かれる姿を想像すると心強い限りです。どんどん御健吟頂きたく存じます。

この選評を書いておりますのが令和七年十二月三日です。御存知のように、十二月一日には今年の流行語大賞が発表され、高市総理大臣の「働いて、働いて……」のあの言葉が大賞となりました。そしてこの賞にノミネートされた語の一つに「二季」という言葉があったのを御存知の方も多いでしょう。これは日本の気候の中で春と秋が極端に短く感じられるようになってしまった、と解釈出来ます。俳句は季題が命です。そして季題は四季折々の自然、そして人間の営みを詠む言葉です。短くなったと感じても、決して四季が無くなったわけではなく、四季折々の季題を素直に詠むことが俳句を嗜む者にとっての大切な、そして楽しい営みではないでしょうか。

それでは特選と入選の講評をさせて頂きます。

風鈴と鉛筆の音響く夜　　渡辺　花楓

夏の暑い夜に勉強をされているのでしょう。受験勉強か、ひょっとしたら夏休みの宿題かも知れません。鉛筆が紙の上を滑る音が聞こえるほどの静けさの中風鈴がチリンと鳴る様子がとても涼しく感じられます。

霜柱ざくりと踏めば朝の声　　西塚　凛

冬の寒い朝出る霜柱を踏んだ音が、何か生き物のように感じたのでしょう。生き生きとした景が描けています。

テスト終え初夏の空へと夢を問う　　坂蓋　陸

一学期の中間テストでしょうか。陸さんの将来の夢が明るく伝わってくるような句です。

友の声夜にとけゆく朧月　　高橋　伶奈

春の空におぼろげに浮かんでいる月。友達の声も朧になり、春の雰囲気が見事に表現されています。

踏み込めば暑さ静けさ割るように　　田中　瀬奈

暑い日に何かスポーツをしているのでしょう。勢いで夏の暑さを遠ざけている様子が伝わります。

花火果つ言えぬまま恋胸に咲き　　山口　優征

好きな人と花火に行ったのですが、告白出来なかったのでしょう。花火の儚さが描けています。

皆様の力作を楽しく拝見させて頂きました。

選者選評

選の後に

日高堯子　先生

今年もたくさんの応募作品に心を弾ませながら選をしました。短歌の表現は、つきつめていえば省略と単純化です。自分の中の思いや情景の核心を、どう絞って言葉として伝えるかが問われます。

今年の特選にはこの一首を選びました。

打ち上げの光ひとひら散りゆけば闇の広さを知るばかりなり　花嶋優月

打ち上げ花火を見ている場面です。花火の歌は毎年多く詠まれているので、場面自体はとくに新しいわけではありませんが、花火の消えた後の「闇の広さを知るばかりなり」という明快な言い切りに、大きな魅力があります。作者の伝えたいことがここに鮮明に出ています。上句の「光ひとひら散りゆけば」という情景描写もなかなか巧み。伝えたいことが凝縮された一首といえるでしょう。

入選には次の五首を選びました。

窓辺から夕陽射しこむアトリエでほおずきの色塗らず筆置く　髙橋美音

風車幼き頃の思い出は今手の中でくるりと回る　三木彩菜

置き去りの言葉一つが浮かびくるたんぽぽの種ゆれる日暮れに　小林愛佳

潮風に石垣白く影を寄せ宇江城の丘月は上りぬ　立岩賢伸

黒い夜雨に打たれるアスファルト街灯を受け咲く冠菊　内田万結

髙橋美音さんの歌は、心の動きがリアルに表現されているところに大きな魅力があります。「ほおずきの色塗らず筆置く」のは何故だったのか。作者の心の動きを読者にさまざまに連想させ、奥行きのある歌にしています。三木彩菜さんの「風車」を使った思い出の歌は、下句が上手い。「今手の中でくるりと回る」と、手の動きとともに、時間の流れを鮮やかに伝えています。小林愛佳さんの歌は表現に手慣れた感じがあり、自分の心とたんぽぽの情景がぴたりとはまっています。立岩賢伸さんの歌の情景は沖縄でしょうか。月の出の宇江城の景色がよく映し出されています。言葉を選んで丁寧に表現された一首です。内田万結さんの歌は三つの名詞を連ねたものですが、初句の「黒い夜」が一首全体のイメージを統一しています。「冠菊」という言葉も印象深く、感性の鋭さを感じます。

毎年のことながら、入選作と優劣つけがたい作品も多く、そのいくつか紹介しておきたいと思います。

つよき陽をさけて木かげにやすらへば蝶は光と影とを遊ぶ　桒原　杏

今は亡き兄の壊れたオルゴール途切れる音の命の儚さ　稲葉喜咲

びっしりとふせんのついた国語辞典自分だけの言葉の宝庫　山田侑季

窓の外ひこうき雲が伸びてゆく迷う自分を少し追いこす　藤野央輝

大沼の光の絲の差す水面優雅に舞ふは大鷹の影　小川凛久

源氏の恋うまれし寺の縁側の過ぎし千年苔青々と　上野珠礼

選者選評

心の窓の明かりを見つめて

阿部正栄先生

地元の中学生に「詩の話」をしました。身を乗り出して聞く瞳の輝き、頷く姿に私も若い頃を思い出して、劇作家で評論家の倉田百三さんの言葉「青春は短い宝石の如くにしてそれを惜しめ」を呟いてしまいました。今回も皆さんの心の窓の明かりを見つめて、一生懸命選考しました。

特選は、髙橋勇貴君の「新たなる一歩」です。高校生になり期待と不安が入り交じる気持ちを、郷土の自然や城と向き合い、励まされながら成長する若い素顔のうたです。〈爽やか、眩い、加速、僕だけの輝き、強く　たおやかに　しなやかに〉等の言葉で進む姿が目に見えます。くじけず、郷土愛の心で前を向く姿に私も元気をもらいました。

次に入選は竹村唯花さんの「私」です。「私は何者なのでしょう。」で始まり最終連「私は何者だったのでしょう。」で生命の明かりを見ようとするうたです。「まだ白のない口で笑い」で感性が光り「どこか幼いままの鰭で溺れそうに」でうたう比喩には感服です。詩の力がある方なので、これからも詩作を続けて下さい。

次の入選は、髙橋美音さんの「石膏」です。きれいな文字の原稿五枚の力作です。石膏と向き合い、凝視し、話しかけ、対峙し心をつかみたいという熱が伝わります。やがて「幾千幾万の世界の醜さも愚かさも吸い込んで」いる石膏は希望の未来を創り続けることが願いと作者は悟ります。言葉が立ち上がり、表現と構成に長けた作品です。

次の入選は、古川桜香さんの「ナマイド―精霊流し―」です。お盆に祖先の霊を送る行事です。おじいちゃんが、お盆に入るときは、足の速い馬で家にもどり、お盆の終わりには、牛歩のごとくゆっくりと切子灯ろうで川に入って行く。この情景の構成が見事です。祖先を慈しみ、敬う心の情感に満ちた作品です。

次の入選は、長谷知美さんの「十七歳」です。「伸ばした手は　安定を掴まず」の冒頭に引き付けられます。〈空虚、棘、波紋、答えのない問〉等の言葉で十七歳はつまずきます。そこから、健気に「不器用に羽を広げている」と光にふれます。跛きながらも一歩を踏み出す姿が、痛いほど伝わり、胸を打つ作品です。

入選最後は、柗丸弥澪さんの「立脚点」です。成長していく心に不安や煩悶、抗う霧が立ちこめ、転びそうになる、その身体を引きずりながらも何とか、より所の「私の為に／誰かの為に／貴方の為に」の立脚点に辿り着く。まさに若い心が外界へ歩みはじめる姿を巧みにうたった感慨深い作品です。

佳作にも光る作品が多くありました。西城妃夏さんの「ふきのとう」松田彩花さんの「知らない人の葬式」星野なつめさんの「ゆめのぼうけん」他です。では、次回も力作を期待しています。

選者選評

佐藤 洋二郎 先生

作文を書くことと小説を書くということはまったく別物で、本当は、楽器や絵を描くことの上達には、多くの練習とデッサンやクロッキーをものにして技術の習得に励むが、小説だけは日本語ができれば、その日からすぐに書けると考えている人が多い。しかしそれは間違いで、小説を書くにしても「技術」が必要である。

そしてどんなジャンルの作品世界にも、その基本にあるのは、喜怒哀楽の感情を持った人間を描き出すことにある。そのことを書く時に少しでも意識すれば、作品の出来栄えも違ったものになってくる。その上、小説を書くことは「創作」とも呼ばれるので、書き手の想像力や感性を駆使して、人間の感情を捉えることができれば必然的に作品は立ち上がってくる。

特選の「わたしのシャッター」の主人公は双子の妹の話。剣道をやる姉は何事にも長けていて人にも好かれる。妹は写真部に入っているが、その姉にとても適わないと思っているが、嫉妬しているわけでもない。むしろ羨望しているが、やはり同じ姉妹として気になる。ある時、慕ってくれる後輩と一緒に写真を撮り、全国高校写真コンクールに応募するが、自分は落ち、後輩のほうが受賞してしまう。秘かに落ち込むが、剣道大会で闘う姉の姿を撮って今度は自分が受賞するが、その複雑な感情と姉との交流がうまく抽出されていて、さわやかな作品に仕上がっている。

入選の「赤」の主人公は生まれながらに「P型色覚」という体質を持っている人物だが、現在はバスの運転手をしている。その体質は赤と緑の識別を苦手とする人のことだが、そのことを隠して仕事をしている。そういう主人公が好きな子どもが、将来は自分も運転手になりたくて接してくる。親しく近づいてくる子どもに、体質のことを打ち明けようかと悩んだりする内容で、後半にやや子どもの口ぶりが大人びているところは気になったが、気持ちよく読めた。

「白線の向こう側」は通学の駅のホームで知り合った一つ上の女子高校生との出会いと別れを描いた作品。電車が一日に数本しか走らない田舎町から東京に出たいと願っている彼女と、そのことに感化される主人公の甘酸っぱい関係がよく書かれていた。「僕」という一人称で通していた作品だが、後半部分に女子高校生の視線で書かれていたところがもったいなかった。

「静かな旋律」は二人の女子高校生が楽器の練習をしながら将来の夢や進路に悩むことを書いた作品で、内容はありきたりだが、素直に書かれているとこに好感を持った。他にも似た作品はあったが、暗く深刻にならず、客観的に自己を見つめて書かれているところが良かった。

選者選評

久米依子　先生

今年度の課題図書は、家族や社会における困難や苦闘、または自分の中の消しがたい難問についてどう対処するか、読者に問いかける作品が揃っていました。

自己内部の「越えられない境界線に直面することの苦しみ」（遠藤さん）を描くのが『仮面の告白』です。主人公は規範と異なる性嗜好を抱え、「自らの本質をどうにも変えられない葛藤」（遠藤さん）に苛まれます。読者もまた「個性の尊重や多様性が語られる時代」（遠藤さん）でありながら内面を「仮面」で隠すことがあると思い当たり、自分と仮面の関係を考察せざるを得なくなります。

その自分と密接に関わる家族の危機を示したのが『かか』です。心身ともに病む母のために娘も痛みを覚え、「人と繋がることの本質、その重みや代償、そして断ち切ることの難しさについての問い」（里見さん）に直面します。「自分の傷を受け入れ、そこに誰かの傷を重ねながら、それでも『人と生きる』という選択」（里見さん）がなされることを、読者は自分の苦しみのように感じながら見守ることになります。

対して外部社会で極限状態に襲われる物語が『カンディード』『想像ラジオ』です。『カンディード』は二百七十年近く前のフランスの作品で、登場人物たちは戦争をはじめとする残酷な事態に次々と巻き込まれ、悲惨な境遇に陥り、時には自らも暴力を行使して多くの試練を乗り越えます。個人の努力ではどうにもならない「不条理な現実にどう向き合うか」（青山さん）が問われ、やがて「避けられない不運は受け入れつつ、目の前のことに全力を尽くす」（青山さん）という策が示されます。平和な秩序が崩れてしまった時、人は何ができるのかを深く考えさせられる作品です。

いっぽう『想像ラジオ』は東日本大震災の被災者をモデルに、死者と生者の関係を問います。むごい災害で急死した主人公は、決して届かないはずの声を「想像ラジオ」で発信します。その声を聞き取り、死者を忘れずに生きることができるか。生の側にいる私たちの態度が問われます。「想像ラジオ」を聴くことは、「生者と死者を想像力で繋ぎ、生き残った人が前を向いて歩く力を得る」（大橋さん）手段でもあり、それは追悼のためだけでなく「相手を想像することで自分の気持ちも整理され、やがて癒され前に進むことができる」（大橋さん）という、私たち生者自身がエネルギーを得る方法でもあるのです。

そして『その日暮らしの人類学』は、経済的に豊かではなくても、効率的な競争社会とは異なる暮らしを営むアフリカ・タンザニアの人々に注目し、「一人ひとり違う「その日」を積み重ねている人間の営為への敬意と共感の書」（三浦さん）になっています。タンザニアの人々は「収入の不安定さや社会的支援の希薄さに抗いながら」（三浦さん）、知人との関係や最低限の労力で成り立つ暮らしを営み、それは「他者と繋がりながら『今日を編む行為』」（三浦さん）として、「その日暮らし」が「孤立ではなくむしろ新たな公共圏を創り得る可能性」（三浦さん）まで示唆します。

どの課題図書も「読む者自身の『生き方の問い』への対話を促し」（三浦さん）、また「私たちは生涯、誰かと結びついている」（里見さん）ことを再確認させます。読書を介して自他の生を新たに捉え、他者に「手を伸ばすことを諦めない」（里見さん）姿勢を尊ぶ。そういう学びに導かれたことを、入賞作の各感想文は伝えています。